

## まえがき

よし悪しをいうにせよ是非を論ずるにせよ

細かい判断もなしに肯定否定を行なう者は

愚か者の中でも下の下たる者だ。

だからはやまった意見はとかく

狂った方角へ曲がりこむ。

その上、情が知にからむ。

まだ穂が実りもしないうちに畠に出て

穂の数を勘定するような、あまりに安んじて、

判断を下す人間にはならないでくれ。

冬の間はずっと硬くて刺だらけだった枝が

その枝先に一輪の薔薇の花をつけたのを

前に見たことがある。

『神曲』天国篇第十三歌一一五―一二〇行、

一三〇―一三五行)

ダンテはウェルギリウスを導き手として地獄・煉獄をめぐるが、私も日本の一人文学者として読者とともに彼らの跡をたどり、あの世をめぐろうとする。それがこの『ダンテ『神曲』講義』である。そのダント『神曲』読解の旅立ちに際し、『神曲』と私の縁について二、三記して、学者としての私の立場を説明しておきたい。

一九六六年、人生の道の半ば、三十五歳の年に『神曲』の邦訳を私は世に問うた。

私は一九五三年に開設された東大大学院比較文学比較文化課程へ第一期生の一人として入学し、翌年、フランス政府の奨学金でいちはやくパリへ渡った。私は「比較」とは複数の言葉を習い複数の対象

を知悉してこそ初めて可能であると思ひ、かつそのように学問を構想し知的世界を拡大することこそが自分の能力にいかにもふさわしいように感じていたので、第一外国語のフランス語の読み書き話しが気兼ねしないほど自由になるや、ドイツ、イギリス、イタリアへと、留学先のパリからまた留学を重ねた。奨学金は一九五四年度の一年間しか出なかつたから、後はアルバイトで三年間、家からの送金で一年間、勉強したのである。帰国してから出版した修士論文『ルネサンスの詩』がイタリア文化会館館長の認めるところとなり、イタリア政府奨学金を与えられ、また船で、今度はフイレンツェ、ペルージャへ留学した。一九六三年の暮れに帰国し、六四年に東大助手となつたが、そのころまでにダンテは地獄篇の全ての歌と煉獄篇の多くの歌は読んでいた。すると「前に『ルネサンスの詩』を訳した時と同じ調子で『神曲』を訳してください」と河出書房から依頼されたのである。

訳し始めたころ、「若い時に古典を訳すと一生つきあうことになる」と竹山道雄氏にいわれたことが

ある。「やつつけ仕事をしてはならない」という訓戒であつたと思う。そして氏にいわれた通り、事実『神曲』翻訳を一九六六年に世に問うたことは私の人生の節目となり、それ以後——比較文化史家の仕事に専念したアメリカ滞在時代を除けば——私はずっと『神曲』とつきあつてきた。いま冒頭にダンテの一節を引いたが、これは東大紛争の最中の一九六九年元旦、駒場で最年長の助手であつた私が天国篇第十三歌から選んで知友に送つた年賀状に印刷した言葉で、それとなく自戒としたのであつた。『神曲』を訳したことはおのずと自信となり、わが道を行く上での生き方の支えともなつた。大学紛争で内が暴力支配の場と化して授業が行なわれなくなつた時、学外で自主的に部屋を借りた有志学生に講義したのも『神曲』であつた。その後、私は大学人としておよそ二十回ほど拙訳を用いて半年ないしは通年の『神曲』講義を行なつて、喜寿を越え今日にいたつている。

第一印象は大切に貴重である。訳しながら受けた印象と、東京芸大、東京大学などでの初期の授業で

感じたことは『中世の四季——ダンテとその周辺』(河出書房新社、一九八二)に、その後の東京大学と定年以後の福岡女学院大学その他の授業結果は『ダンテの地獄を読む』(河出書房新社、二〇〇〇)にほぼまとめた。今回の書物は、私が大学を去った

後の二〇〇七年四月から一年間、荻窪の読売文化センターで行なった社会人向けのレクチャーをまとめた講義録である。小説に私小説があるなら、私語りの私講義といってもいい。月に二回、第二・第四土曜の一時半から三時まで、合計二十四回講義した。本書ではそれにこの「まえがき」を付し、本体の講義部分を二十五回に分けて整理した。

地獄篇から煉獄前地にいたるまでをとくに丁寧に読んだのは、過去の講義経験に徴して、『神曲』の何が日本人に限らず今日の読者の心を捕らえるか、何が人々の関心を惹きつけるか、そしてなによりも、何が教える私自身の興趣をそそるか、はつきり見当がついていたからである。『神曲』について、今日の多数の読者の好みには、実はかなり明確な傾きがある。そしてその好みにはそれなりの正当性がある

と私は確信している。それが漱石が『創作家の態度』でいうところの『神曲』中の「今の人の心に訴へる箇所」でもある。それでそれらを重んじて読んだ。

学問的体裁を整えるために地獄篇・煉獄篇・天国篇に等しい時間やページを割当てるといふ、イタリヤ伝来の形式尊重主義はとらなかつた。講義開始前から講義内容の分配はほぼ現行通りに考え予告していたのであり、実はこの力点の置き方そのものが私の『神曲』各篇に対する批評のあらわれであるとお考え願いたい。世の中には講義せずとも面白味のおのずと合点される作品もある。そのような作品に対しては講義することはおおむね不用であり、時には有害ですらある。評釈はせずともよい。世の中にはまた講釈されると面白味のわりに増す作品もある。説明を聴く、聴かないで、わかりようがまるで違う作品があるが、ダンテの地獄篇はまさにそれに該当する。この丹念に書き込まれた詩作品はその点ではまことに教え甲斐のある造りになっている。それからさらに付言せねばならないが、世の中にはたとい

講釈しても面白味のさほど増さない作品もある。評釈しても面白味が増さず、内容が聴衆に訴えないような作品の読書を強いるつもりはない。それを無理強いすることは読者の精神衛生に悪いと感じている。それでそのような作品に対しては評釈はせずともよい、と考えるのである。

学生たちの反応はすこぶる敏感である。ダンテ『神曲』地獄篇を講義すると二百余名の大学生が私語一つ無く説明に聴き入り、大教室が一瞬恍惚となる時すらあるが、天国篇についてはそのような至福を味わうことは私にはついぞなかった。天国篇は、原文にせよ訳文にせよ、一通り読んだだけでは合点がいかない箇所が多い。註釈を読んでもなるほどと頷く。しかしその理解の過程はいわば理学の教科書を理解するような知的操作であつて、詩を享受する楽しみからはむしろほど遠い。そのような天国篇のテクストであるだけに、註釈を書く人には解読を通して知的な喜びが生じることもある。読者の中にも同じ種類の楽しみを覚える人はいる。私自身もそれを味わいはした。しかし独立して読むだけでは意味が

通ぜず、それだけでは必ずしも興味が湧かず、註釈が必要とされる部分は、詩的作品全体の中ではやはり欠陥部分というべきではないだろうか。残念なことにはこの種の傾向は煉獄篇末尾から天国篇全体を通じて強まる傾向にある。キリスト教護教の立場に立つてダンテのために弁じる人は、あるいは『神曲』を詩文学として享受しようとする私とは意見を異にするかもしれないが。しかしクローチエが『ダンテの詩』でも指摘するように、ダンテが天国篇で連発する「筆舌に尽くし難い」*indescrivibile*とか「言語に絶する」*ineffabile*の形容は詩としては実体が無いにひとしく、けつして効果的ではないのである。クローチエがその際あげる一例を引くと、

彼女（ベアトリーチエ）のにこやかな顔を振り向いて見た時、

神々しい歓喜が私の上に照り輝いたが、

この歓喜に比べれば、人間の目をひき心を捉えようとして

自然や技法が作りだしたような食物は、

人間の肉体の姿をとるにせよ絵姿をとるにせよ、  
みなあわせても、物の数にも入りはしない。

(天二十七歌九一―九六行)

天国で覚えた歓喜に比べれば、人間世界の作品は  
なににせよ「物の数にも入りはしない」とダンテは  
いう。この地上のものなど一切を合したとしても  
「無きに等しいとさえ見えよう」*parrebero niente*  
式の表現を、修辞学では否定的誇張法 *iproboli*  
*negative* <sup>(1)</sup> というが、天国の素晴らしさを「口では  
言えない」「言葉では言い表わせない」とダンテが  
言ってしまうと、*paradiso* の素晴らしさ  
はそれは口では言えるはずはないであろうと有難が  
る向きは別として、多くの読者は光り輝く天国篇を  
単調な光の世界と感じてしまい、その色彩の欠如に  
倦怠の情をおぼえるのではあるまいか。いつてみれば  
天国篇は単色の光の濃淡の変化のみの世界である。  
もちろんそこには天国篇第三歌一四行のピツカルダ  
を評した「白い額の真珠」のような美しさもあるが、  
しかしそこに詩を感得し得る人は限られた読者であ

ろう。

そのような『神曲』講義の実験的経験を踏まえて、  
問題の諸点についてさらに専門的な吟味を加え、右  
の説明を具体例に即して別様に述べるとおよそこ  
うなる。ボッカッチョは『デカメロン』執筆に際  
して、各日・各話に「まえがき」と枠小説 *nouvelle*  
*a cadre* といわれる形式の作品の「額縁」を付した。  
それは各話の本体を構成する現実生活に密着した会  
話混じりの文章と質を異にする、エレガントな人工  
の文章から成っている。ダンテの『神曲』にも実は  
それと同じ二傾向の文章が混在する。『神曲』は散  
文の『デカメロン』と違って詩形式で書かれている  
が、本書で詳しく取りあげた地獄篇と煉獄篇のいく  
つかの歌は、現実生活に密着した会話混じりの文章  
と同じ要素から成り立っている。「生々しい低次の  
文体」と『イタリア語の歴史』(草皆伸子訳、白水  
社、二〇〇八)の著者ヴァレリア・デルラ・ヴァル  
レが呼ぶところの文章である。それに対して天国篇  
や煉獄篇の多くや『新生』は、『デカメロン』でい  
えば「まえがき」と「額縁」の文体に相当するエレ

ガントな人工の文章で書かれている。その違いをデルラ・ヴァルレは、地獄篇では胃袋も屁も話題となるが、『新生』や天国篇ではベアトリーチェの肛門が話題となることなどあり得ない、とすこぶる極端な例で説明した（『イタリア語の歴史』六五頁）。それは天国篇などでは、語彙や発想の次元にとどまらず、心理的にも文章的にも「生々しい低次の文体」から著者ダンテが離れてしまったことを指している。そしてそれと同じような二傾向はポツカッチョの中にも顕著である（同九〇頁）。

私は四十年前前の大学紛争直後、ポツカッチョの『デカメロン』の各話の本体を構成する現実生活に密着した会話混じりの文章のみを教室で片端から読んで、眉を釣り上げた学生たちの顔を解いた。それは生き生きした散文であつたから面白かつた。学生たちも笑わずにいられなかつた。ところが過去数年来、『神曲』との比較という問題意識もあつて『デカメロン』を全訳しているのだが、それにあたり、各日・各話の「まえがき」と「額縁」部分をも訳すこととなつた。それは作品のいわば装飾部分に当た

る。そのエレガントな人工的文章の翻訳が意外なほど手間どるのである。そしてポツカッチョのその典雅な部分のイタリア語はダンテの『新生』などのイタリア語と同性質であることを指摘されて、なるほどと合点するところがあつた（私がデルラ・ヴァルレの『イタリア語の歴史』を引いたのは、著者がこの問題に言及しており、日本の読者の目にも届き得るからであり、この訳書が現在のイタリアの学者の見方を示しているからである。ただしとくに名著というわけではない）。

リアルで真に迫力のあるペスト描写は別だが、ポツカッチョ作品の粹の部分は、凝つた優雅なイタリア語で書かれていて、その部分は、もつてまわつているばかりか、読者の興味もさほど惹かない。過去の経験に徴して、『デカメロン』の何が日本人に興味深いか、何が多数の人の関心を惹くか、そして何が私自身の興味をそそるか、これも見当がついている。そのような日本人多数の好みにはあるはつきりした傾向がある。そしてその好みにはそれなりの正当性があることを私は確信しているのである。世

間はややもすれば読者の好みは艶笑えんしょう文学部分にありと決めてかかりがちだが、問題の核心はそこにあるのではない。問題はデルラ・ヴァルレがいう意味においての、文体の次元の問題なのである。「生々しい低次の文体」を排除する時、ポツカッチョもその生きの良さを失う。そしてそれと同じことは『神曲』の詩人ダンテについてもいえるのであって、『地上楽園』さらには天国に向けて昇るにつれて、その影が薄れる所以ゆえんである。なお、この「低次」の語に惑わされて価値的に低いとする見方は誤りで、現実生活から遊離して「高次」の抽象と観念操作の世界にはいつてしまう時、文章の力は低下し、生命力は希薄化し、詩の修辭化が進むということである。

この稿をほぼ書き終えた時、イタリア大使に招かれデ・マウロ教授夫妻と食卓を共にする機会に恵まれたので、そんな私の見方も述べてみた。隣席のデ・マウロ夫人もヴィテルボ大学教授で同じく言語学者であるが、夫妻が共産党員であるからというわけではないと信じるが、イタリア人もいまは天国篇にさほど興味は示さな

い、と率直に述べた。デ・マウロ教授はイタリアで文部大臣も勤めたほどの人だから、別に特に偏向した意見を述べたのではないと思う。私自身はダンテの天国篇はもとより、クロローチェの『ダンテの詩』の通読に際しても天国篇部分の説明を読むのには抵抗を感じた。いわばこの『神曲』講義の準備のためにお義理で読んでいる自分を感じたからである。そしてそのクロローチェ自身がヴィーコやマコーレーのダンテ評を引くことで神学・形而上学・物理学知識の介入がダンテの詩を害していることを間接的に示唆しきしているのである。

本書が従来日本人の『神曲』講義とさらに違う点は、私は『デカメロン』の訳者としてポツカッチョの人間観にも非常な同情をもっており、そのポツカッチョの立場からも『神曲』を見てきた、また今日の常識的な日本人比較研究者の立場から率直に考えてきた、という点でもあろう。本講義の第十七回でもふれるが、『神曲』は西暦二〇〇〇年、ロンドン『タイムズ』紙の文芸付録によって過去千

年間の世界文学の最高傑作に選ばれた。『神曲』の訳者としてはまことに嬉しいことである。しかし私はキリスト教詩人ダンテの思いあがりに関したことは遠慮なく批判した。日本人の外国研究者はややもすれば研究対象と一体化して「吾が仏尊し」となり、研究対象をひたすら讃<sup>た</sup>える傾きがある。しかし私は「吾が仏尊し」という態度は取らない。また「吾がキリスト尊し」という日本の一部にあるダンテ崇拜者のような『神曲』を奉る讃歌を唱えるつもりはない。

なおここで、近年にわかに数がふえだした日本のイタリア語イタリア文学専門家についても、一言感想と希望を述べたい。日本でイタリア文学科は日独伊三国同盟が結ばれた折に旧帝国大学では京都大学に設けられた。それに対し東京大学はすこぶる遅く、私が東大紛争以前から一般教育演習で教えていたイタリア語が正式に第三語学の一つとして認められたのは一九七四年である。教授会で責任者として私の名が突然呼ばれた時は緊張した。その後、本郷の東大文学部にイタリア文学科が新設された。しかし当

時の日本ではイタリア語は依然としてマイナー・ランゲージであつて、その証拠にそのころの私はずっと伊仏、仏伊辞典を用いていた。そのことを思うと、日本におけるイタリア語の発展の具体的な目印は、池田廉教授以下の手で以前の伊和辞書に比べて格段の進歩をとげた、小学館『伊和中辞典』が出た一九八二年ではないかと考える。なお二〇〇七年からは東京大学でも文科三類でイタリア語が第二語学の一つに昇格した。それを祝し、その機会に村松真理子氏が専任で教える駒場の東大教養学部で、イタリア学会第五十五回大会が開催された。当日、大会の結びに私は「ダンテは良心的な詩人か——地獄篇第二十八歌の魅力」と題して講演した。それは河出文庫版『神曲』地獄篇の巻末に全文掲げてあり、本書の第十七回・第十八回ではさらに詳しく説明した。私はその種の問題提起も学会でなされてしかるべきことと考えるのだが、いかがであろうか。

そのようなことをいうのはほかでもない。私は学会参加者のきわめて多くが専門という観念を極端に絞って考えていることに若干の違和感を覚えるから



である。ある種の特殊な専門論文を書く人は直接イタリア語で書くべきであって、それを日本語で発表するのは中途半端な感じすら覚えた（その種の問題点については、河出文庫版『いいなづけ』下巻の「文庫版訳者後書」で詳述した）。日本語で発表する人は、やはり日本の読者を想定するのが自然ではあるまいか。私はどちらつかずの学問的体裁を整えるだけの行き方には多少の疑問を感じるのである。かくいう私は銜学げんがくを嫌い、このような講義録をありのまま活字にすることとした。それがいかなるものであるかは御一読願えればおわかりいただけると思うが、日本の教養ある読書人のためのダンテ『神曲』講義録である。文学作品を観念で論じることはせず、またイデオロギーで決めつけるような、空虚な理論倒れの話は一切していない。本書とともに『神曲』テキストを読み進んでいただければ、ダンテの詩がいかに私たちに身近で、新鮮で、興味深い文学であるか、今日の日本の聡明な男女の読者には、自ずとおわかりいただけるものと信じている。いまままで日本語で書かれた『神曲』講義としては、本書

はイタリアのアカデミックな「ダンテ講義」Lectura dansis にきわめて近い内容であると信ずるが、心配しないでいただきたい。たとい難しい内容であろうとも、平明に、わかりやすい言葉で説明してある。西洋のダンテ研究は汗牛充棟あせうまゆしゆうとうである。研究者の多くはその点数に戸惑い、その量に萎縮いしゆくしがちだが、私見では今日の日本でダンテを取りあげる際に一体なにが大切か、という選択こそが私たちにとっては肝要なのであり、その日本人読者なり日本人学生なりが置かれている立場と講義する自己自身が置かれている立場についての文化史的な自己吟味きんみが不可欠なのではあるまいか。日本語で書く限りは、日本の読者と無縁なイタリアの国文学としてのイタリア文学本位の、小さな特殊な専門に特化すればそれで良いというものではない。特化すればするほど、なるほどその小分野でのオリジナリティーは発揮できるかもしれない。若い研究者が自己独自の研究領分を確保したい気持ちもわからないではない。また英才が陥りがちな、自己を研究対象の外国と同一化したいい気持ちもわからないではない。それは間違いなく一

面における進歩ではあるが、しかし同時に小専門家に退歩するという学問矮小化の危険性を含んでいることを、ゆめ忘れてはならない。学者の専門家意識といえは聞こえはいいが、それはややもすれば自己防御的な縄張り意識と結びついているのである。日本のダンテ研究者の目がイタリアに固定され、イタリア以外の外国や、正宗白鳥などの日本人の先人の発言や業績に必ずしも留意しないのは、ややいびつな専門家意識というか、日本人としての自己卑下のあらわれとしての同胞無視ではあるまいか。

それに反し、自分自身が置かれている文化史的立場を自己吟味し、漱石のいわゆる「自己本位」の立場に立ち、自分自身で学問を再定義し、自己の能力を十全に發揮できる学問的枠組みを作るならば、新しい、広々とした学問的視野は自ずと開かれるはずである。世間の平均的な読者に向けて話しかけるといのが私のスタンスである。今日の日本社会は世界でも稀な高学歴社会としての成熟をとげつつあると私は観察している。白墨臭がない拙著は、一見旧帝国大学風のアカデミズムに背くやに見えるかもし

れない。しかし私は昭和初年の岩波文化の権威主義の方がむしろいびつだったのではないかとさえ考えている。このようなスタイルの私が日本の人文学者として、外国の大学や学会でもいろいろと発表し、半生にわたり内外で著作を公刊し得ていること自体が、その種の学問観の *sona pumo* を証しているのではあるまいか。

二〇〇七年春、私が関西での生活から東京に戻るや、荻窪の読売文化センターは私を講師に招いた。東大時代の私の師の島田謹二教授も晩年そのセンターで講義されたから、私もいかがですか、という言葉巧みなお誘いであった。「俗の為に制馭せられさへしなければ、俗に随ふのは悪い所ではない。卻つて結構です」と森鷗外は言った。私は喜んでお引き受けした。しかしカルチャー・センターで聴衆がもつとも集まらないのは教養講座であるという裏話も聞かされた。聴講生の申込みが少なければ講座は自動的に中止になる、と支配人からビジネスライクに申し渡された。開講にいたらなかった講師のお名前の中にはNHKの教育テレビなどでお名前もお

顔も知られた教授もあり、私自身、開店休業になりはせぬか、とひそかにおそれつつ教場に赴いて驚いた。四半世紀昔、島田先生の講義に列した方々が、今度は私の『神曲』講義にも現われたからである。それやこれやで私は、かつてない熱心な、社会体験の豊かな、年齢も学歴も高い聴衆を相手にお話することとなった。ただ私には島田先生のように滔々<sup>とうとう</sup>と弁ずる才覚がない。それで一時間半の授業に先立ち、毎回四百字で五十数枚分の講義原稿を必ず用意した。それを基に話した後、質問を受け、講義の後でまた書き直した。というか最初からこの一冊をまとめるために講義を引受けたというのが正直なところである。

聴衆の皆様は、大学教授も、家庭婦人も、理学博士も、学部長も、元会社役員も、編集者も、大学院生も、また山梨の笛吹川の奥から上京してくる学士号をもつ葡萄<sup>ぶどう</sup>作りの方もおられた。どなたもダンテの専門家ではない。とはいえ、かつてこれほど知的水準の高い人々を最高学府と呼ばれる場所でも教えたことはない。これこそが日本社会の知的ソフィス

テイケーションを示すものではあるまいか。西宮のさる私立大学を後に帰京して荻窪で市民の皆様をお教えした時は、久しぶりにアカデミック・アトモスフェアを呼吸<sup>うんでい</sup>できて、まことに嬉しかった。知的雰囲気<sup>うんでい</sup>に雲泥<sup>うんでい</sup>の差があつたからである。

カルチャー・センターを持ち上げて、アカデミアを軽侮<sup>けいぶ</sup>している、パラドクサルな言辞を弄して失礼である、とお叱<sup>しか</sup>りを受けそうである。しかし現在のある種の大学の実態については、関係者にはもつとずつと厳しいリアリスティックな認識が必要なのではあるまいか。単なる文科省向けの作文でしかない大学のシラバス<sup>しらす</sup>を拵<sup>こしら</sup>えて、その見せかけが教育の現場の実態であるかのごとく世間に宣伝し内外の目を誤魔化<sup>ごまか</sup>すことは、徳義的に考えてもいかなるものであろうか。大学の経営存続そのことが自己目的化している一部の大学の現状を御存知の方には、平川のこの指摘が逆説でないことはおわかりであろう。今日の日本社会では、知的成熟はもはやある種の大学内に求めることはできないのかもしれない。なるほど豊かになつたわが国の大学構内には、新しい塔は

次々に立ちつつある。しかし肝心の象牙の塔は、大  
学キャンパスとは別のところに移ったのか、消えた  
のか、そもそも近頃は「象牙の塔」という言葉その  
ものが新聞雑誌の紙面から失せてしまった。荻窪の  
駅ビルがもとより象牙の塔であるはずもないが、し  
かし少なくともその一室には良き知的雰囲気があっ  
た。

私は青年時代を長くパリで過ごしたせい、サロ  
ンの教養ある男女に明晰めいせきに述べる語り方 *expose a la  
française* を尊んできた。それで話の準備に手を抜く  
ことはなかった。ただ聴衆に小学校・中学校・高等  
学校以来の知己がまじったことも手伝って、昔の思  
い出もいろいろ語った。というか、いわゆる脱線も  
した。それは息抜きというより、おおむね学問批判  
などの具体的な話である。『神曲』読書にまつわる  
パーソナル・タッチもあってよいのではないか、い  
やむしろ必要なのではないかと考え、学者として  
の身上話も意図的にまじえた次第である。助手で  
あった私が東大生に向けて英訳本で『神曲』講義を  
課外に始めたのは東大紛争の最中であった。そのた

めにそれにまつわる回想が再三まじった。平成の平  
静な大学で学び、教える人にとつてはもはや理解が  
困難であろうが、昭和四十年代の大学は毎年のよう  
にストライキがあり、五十年代もまた学生委員は辛  
い仕事で、私たちはそのためにおびただしいエネル  
ギーを空しく費やしたのであった。

ただし学問観や大学観については、世の中にさま  
ざまな別の見方もあろうかと危惧して、円満な常識  
の持主である大島真木教授に再度原稿を見ていただ  
き、脱線の度が過ぎると指摘された箇所は削った。  
なお私的に類する発言はいずれも二字下げで組んで  
ある。この「まえがき」の中でも先ほどのデ・マウ  
ロ夫妻との会話のごときは二字下げの扱いをしてそ  
の見本とした。お好みに合わせぬ読者はなにとぞその  
部分は読み飛ばしていただきたい。

私は敗戦後の日本について二つ判断を誤った  
ような気がする。一つは戦中派はきちんとした  
教育を受けておらず実力不足と軽視した。この  
判断は人文学の学問の分野では適当したが、戦  
後の日本社会の復興は、戦死した同世代の者の

ためにも黙々と頑張ってくれた、私より一まわり上のその戦中派に多くを負うている。感謝せねばならない。二つは戦後生まれの民主主義世代の登場で日本はさらに良くなると期待した。

この期待は経済・政治の面はもとより学術の面でも意外に満たされなかった。「それはそうだろう。戦中派にとつて最大の記憶は戦争だ。それにたいして団塊の世代にとつて最大の記憶はたかが大学闘争だ。前者には深い反省があった。しかし大学闘争で騒いだことが正しいと思ひ込んだような愚かな人間には反省がない。自分たちを取囲む情報空間がいかにいびつであるかという自覚や反省のないまま育つた人に、きちんとした判断も仕事もできるはずはない」。そんな悪態をついたベテラン評論家の指摘が事実だとすれば――私はそれがどうやら当たっていると思ふ。信じるが――淋しいかぎりではないか。

大学院で教えた授業内容を必ず書物にして公刊する同僚教授は、かつて勤めた東京大学においても多いとはいえなかった。『アーサー・ウェイリー

——『源氏物語』の翻訳者』（白水社、二〇〇八）など、カルチャー・センターの講義をも次々と書物にする私をフランスの一友人は「度し難い教授」『*prof. incurable*』と笑ったが、しかしながら、『神曲』

と四十年以上の縁のもとに本書が成っているように、ウェイリーについても、四十年近く大学紀要に発表し続けてきたからこそ、きちんとした大冊にまとめられることも出来たのである。そのように学術書を公刊しつづリズムのある生活が続け得る幸福を私は天に感謝せずにはいられない。『神曲』翻訳や先の二冊の研究書『中世の四季』『ダンテの地獄を読む』と同様、この講義録も河出書房新社から世に出ることとなった。生涯を通して名のある出版社からの注文が絶えないことほど文筆を業とする学者にとつて嬉しいことはない。今回は木村由美子氏と伊藤靖氏の配慮にあずかった。深く御礼申しあげる。

前二冊が個別の主題に即したダンテ研究書であったのに比べると、今回の書物は『神曲』の流れにそつて印象深い場面を網羅的に説明してある。講師である私の生なまの声こゑが伝わりところが本書の特色である。

る。それだけに『神曲』のテクストの言葉の妙趣そ

のものがさらにはつきりと表面おもてに出ており、ダンテその人が生き生きと活動し、きわめて現代的にわかりやすく面白い学術的な大冊となっているのではな  
いか、とひそかに自負している。カルチャー・セン  
ターでの講義の語り言葉を残したのはそのためであ  
る。書き言葉に改めず、意図的に教室での口調を保  
存した。テープを付録につけずとも私の声は伝わる  
であろう。ただし私の常として、文章は整理してあ  
り、推敲すいこうしてある。扱った対象が世間に難解の先入  
主を与え続けてきたダンテの『神曲』であるとはい  
え、意外に読み通しやすいに相違ない。詩の楽しみ  
や学問の歓びが伝わるに相違ない。なおこの講義の  
『神曲』引用は二〇〇八年から九年にかけて出た河  
出文庫版に依拠している。この文庫版を平川訳『神  
曲』の決定訳と訳者は考えている。

最後に、私の授業を聴いてくれた方々に感謝し、  
またこの先この本を読むであろう未見の読者の皆様  
方にあらかじめお礼を申し述べたい。皆様がこの講  
義録を読むことで『即興詩人』の主人公アントニオ

のように、

「何等の快事ぞ。『神曲』は今我書になりぬ」

と叫ぶことができれば、ダンテの彼岸の旅路の導  
者として欣快きんかいこれに過ぎることはない。なにとぞ  
ハッバス・ダアダアもどきの術学者げんがしやの手からダンテ  
をふりほどいて、ダンテを吾が友とし、『神曲』の  
楽しみを分かちあっていたきたい。森鷗外はドイ  
ツ留学中の明治十八年八月十三日、架上から洋書を  
引き出して叫んだが、あの期待に胸を膨らませた言  
葉が今あらためて思い出される。

「ダンテの『神曲』は幽昧いゆうまいにして恍惚、……誰か  
来りて余が楽たのしみを分つ者ぞ」

註

- (1) Benedetto Croce, *La Poesia di Dante*, (Bari: Laterza, 1966) p142.
- (2) Benedetto Croce, "Intorno alla storia della critica dantesca" in Benedetto Croce, *La Poesia di Dante*, (Bari: Laterza, 1966) pp.175-176, 191-192.

# ダンテ『神曲』講義

まえがき..... 3

## 第一回

### ダンテの『新生』

平川の講義について..... 30

聖母崇拜と淑女崇拜..... 33

母語と清新体..... 47

## 第二回

### 仏教の地獄とキリスト教の地獄

『神曲』は難解か..... 55

日本人にとって地獄とは何か..... 62

明治の日本人とキリスト教の地獄..... 77

## 第三回

### 作品の冒頭

人生の道の半ば..... 85

ウエルギリウス登場..... 100

## 第四回

### 地獄の門

あの世めぐりの始まり

直喩という技法

地獄の門の銘

日和見主義者たち

## 第五回

### 三途の川、リンボ辺獄

渡し守カロン

リンボ辺獄にいる偉人たち

## 第六回

### 肉欲の罪

地獄の裁判官ミノス

パオロとフランチェスカ

## 第七回

### 大食らいの罪、貪欲と浪費の罪

怪物ケルベロス

チアッコの予言

ブルートンの奇声

欲張りの群と浪費家の群

運命の女神



## 第八回 忿怒の罪、地獄の下層界へ

ステュクス川を渡る……………221

プレギユアス……………225

フィリッポ・アルジェンティ……………227

『デカメロン』に登場する『神曲』中の人物……………233

デイースの城門……………238

## 第九回 異端の罪、暴力の罪

ファリナータ……………252

カヴァルカンテ・カヴァルカンティとその息子グイド……………258

未来を予見する能力……………265

ミノタウロスとケンタウロス……………270

## 第十回 自殺者の森、熱砂の沙漠

対照の強調……………278

『神曲』の中の「甘え」……………280

「なぜ私を折る？」……………282

ピエール・デルラ・ヴィーニャ……………286

自分で自分を盗む者……………293

ギリシャ神話とキリスト教の混淆……………299

## 第十一回 男色者たち

眞理ハ細部ニ宿ル……………305

エリオットとアウエルバツハ……………308

ブルネット先生……………315

背徳のフイレンツエ名士たち……………326

## 第十二回 悪の濠、欺瞞の罪

あくほりぎまん  
怪獣ゲリユオン……………333

高利貸たち……………341

空中飛行……………344

十の悪の濠……………349

女衞、阿諛追従……………354

## 第十三回 聖職売買、汚職収賄

脚で泣く法王……………361

占師たち……………375

『神曲』翻訳のきっかけ……………378

鬼の登場……………384

## 第十四回 鬼どもの行状

鬼どもの合図……………391

鬼どもの案内……………401

逃げおおせたダンテ……………409

偽善者たち……………414

## 第十五回 異形の者

欺されたウエルギリウス……………418

ヴァンニ・フツチ……………426

動物変身譚……………435

## 第十六回 オデュセウスの詩

オデュセウス……………445

ガイド・ダ・モンテフェルトロ……………467

## 第十七回 ダンテの自己中心的正義感

罪の神学的分類……………476

分裂分派の徒と見なされたマホメット……………482

ベルトラン・ド・ボルン……………494

## 第十八回 地中海世界と寛容の精神

ダンテは良心的な詩人か……………500

「真面目な」ダンテと「不真面目な」ボツカッチョ	503
キリスト教至上主義者のダンテ	515
ユダヤ人に対する態度	519

## 第十九回 氷の国、裏切の罪

巨人たち	530
裏切者たち	532
ウゴリーノ伯	539
激越なダンテ	549
ブランカ・ドーリア	551

## 第二十回 地獄の底、煉獄到着

悪魔大王	554
地獄からの脱出	560
煉獄の島	567
島守カトー	571
自由とは何か	574
暁闇の時	577

## 第二十一回 煉獄前地

カゼラ	583
-----	-----

マンフレデー……………594  
ベラックワ……………602

## 第二十二回 『神曲』と複式夢幻能

ブオンコンテ・ダ・モンテフェルトロ……………607  
謡曲『敦盛』との比較……………616  
ピーア……………627

## 第二十三回 七つの環道

高慢の罪を浄める人たち……………632  
煉獄山を登る……………641

## 第二十四回 地上楽園から天国へ

フォレーゼと妹ピツカルダ……………652  
ベアトリッチェとの再会……………662

## 第二十五回 天国篇

天国篇の詩は生動しているか……………672  
聖務フランチェスコと『創造讃歌』……………681  
有難がつてはならない……………693  
ダンテの詩的天分……………695

カッチャグイダの予言

至高天へ

中世の四季——フォルゴレ・ダ・サンジミニャーノ

中世の十二カ月——曆詩

『中世の四季』ふたたび

ダンテ『神曲』と非ヨーロッパ世界

著者について

ウンブリアに住んで平川作品を読む

著作集に『ダンテ『神曲』講義』を収める際に

——誤訳の罪などタブーにふれる諸問題について

Anatomia della dipendenza di Dante

699

703

711

726

735

杉田英明

小谷年司

堀田政亨

平川祐弘

平川祐弘

左 12

索引

左 1